

Side-C

『こころ』ブックガイド

夏目漱石『こころ』読解から前進するために

「チック」と「タック」の間で
——夏目漱石『こころ』

小峰 隆広

【注記】

このテキストは、世田谷学園において、平成23年度第四学年（高校一年）現代文の授業における夏目漱石『こころ』読解終了後の発展学習のために、教科担当者である鶴川龍史と小峰隆広によって企画・執筆・編集されたものである。

【紹介文献】

1. 森鷗外「かのように」
2. ジョン・ケージ「4分33秒」
3. 柄谷行人『漱石論集成』
4. ルネ・ジラルル『欲望の現象学』
5. 谷崎潤一郎『痴人の愛』『卍』
6. フランク・カーモード

『終りの意識——虚構理論の研究』

7. ドストエフスキー『罪と罰』

『こころ』の「先生」は「遺書」のなかで「明治の精神に殉死する」と書いていた。その箇所を、もう一度読んでみよう。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。(…)
私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。(「先

生と遺書」五十五～五十六)

時代の精神のために死ぬというのは、
どういうことだろうか。ここには何か、
私たちにとって「わかりにくいもの」(中
野重治)がある。「先生」はおそらく、
それが青年にも実感を持って伝わらない
ことを予期していたのだろう、続けて次
のように書いている。

私に乃木さんの死んだ理由がよく解
らないように、あなたにも私の自殺す
る訳が明らかに呑み込めないかも知れ
ませんが、もしそうだとすると、それ
は時勢の推移から来る人間の相違だか
ら仕方がありません。あるいは箇人の
もって生れた性格の相違といった方が
確かかも知れません。(五十六)

たしかに、私たちには先生の自殺する理由が「明らかに呑み込めない」。なぜなら、私たちは「明治」や「国家」なるものが、近代的な契約観のもとに成り立った「虚構」に過ぎないことを既に知っているからだ（授業で扱った評論の数々を思い出してみよう）。「先生」が「明治」という時代のために命を捧げると書くとき、それが私たちの目にどこか白々しい空言のように映ってしまうのは致し方ないことだ。「先生」はここで、時代なるものを、あたかも実在するものであるかのように扱っている。いや、もっとはっきり言おう。「先生」は「明治」というフィクションを実体と取り違えているのではないか、と。

だが、少し立ち止まって考えてみよう。

はたして私たちに「先生」を笑うことができるだろうか。現に、私たちはある特定の「時代」（＝平成）の中に生きており、その時代・文化の空気を呼吸している。「先生」とは程度の差こそあれ、私たちもまたひとつの「時代」を自明のものであるかのように生きている。それは否定することの出来ない事実ではないだろうか。

そもそも、「時代」とはいったい何だろうか。

大雑把に言ってしまうえば、おそらくそれは、本来均質で切れ目のない時間に「始まり」と「終わり」という人工的な区切りをつけたものだ。私たちの身の回りには、そうした「時代」に関する言葉はいくらでも見出すことができる。おそらく、それは「先生」の言うような「時勢の推

移から来る人間の相違」や「箇人のもって生れた性格の相違」といった特殊な差異を超えた、普遍的な意識である。

イギリスの文芸評論家のフランク・カーモードという人が、『終りの意識——虚構理論の研究』という本の中で面白いことを書いている。人間が時間を「始まり」と「終わり」に区切るのは、それが最初から人間の意識の中にインプットされているからだというのだ。例えば、私たちが普段、アナログ時計の針（秒針）の音をどのように聞いているかを考えてみよう。さて、時計は何と「言っている」か。多分私たちのほとんどは、「時計は『チック・タック』（あるいは、チク・タク）と言っている」と答えるだろう。

だが、実際には「チック」と「タック」の音は、全く同じものである。しかし、

人間はそれを別の音であるかのように認識してしまうのだ。カーモードは次のように書いている。

この虚構によって、われわれは時計を人間化し、時計にわれわれの言語をしゃべらせているのである。もちろん、この二つの音の間に虚構上の差異を与えているのはわれわれである。チックは物理的な始めに対してわれわれが与えた語であり、タックは終りに対して与えた語である。われわれはその二つの音には相違があると言う。(フランク・カーモード『終りの意識——虚構理論の研究』岡本靖正訳・国文社、59 ページ)

この「チック」と「タック」をずっと

長く引き伸ばしたものが、おそらく「先生」にとっての「明治」だったのだ。もう一度、「先生」の遺書を読んでみよう。「先生」はこう書いていた。「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました」。いわばここでは、「明治天皇」の存在が「先生」にとっての時計なのだ。つまり、こういうことだ。

チック：「明治の精神が天皇に始まって」

タック：「天皇に終わった」

この「チック」と「タック」の間こそが、「先生」の生きた、そして私たちの生きる「時代」である。「先生」はそれを実在のものに見做し、私たちはそれを虚構であると冷めた視線を送っている。だが、そこにどれほどの差があるのだら

うか。少なくとも、「チック」と「タック」という額縁に切り取られた「時代」という名のイデオロギーの中に生きているという点において、私たちは「先生」と同じではないだろうか。いや、もしかしたら、それを虚構と知ってしまっているだけ、もっと具合が悪いかもしれない。というのも、イデオロギーというものは、それが人々によって信じられていないにもかかわらず、人々があたかもそれを信じているかのように振舞ってしまうことによって成り立っているからだ（スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社、及び、東浩紀『存在論的、郵便的』新潮社）。

さらに踏み込んで考えてみよう。「先生」の言う「明治の精神」とは何であったか。柄谷行人は「西南戦争」に着目す

ることで、ひとつの興味深い視点を提示している。柄谷によれば、「西南戦争は『第二の明治維新』であり、明治維新の理念を追求するものとみなされ」ていた。西郷隆盛が現在でも英雄と見做されているのは、彼が悲劇的な最期を遂げたからだけではない。それはむしろ、彼が「明治維新」の可能性を追い求め続けていたからであるといつてよい。そして西南戦争は単に西郷たち維新志士の挫折であるのみならず、明治十年代を経験した青年たちの挫折でもあった。Kの異様なまでの求道性もそこから説明される。「彼らがそのような内面の絶対性に閉じこもったのは、明治十年代末に明治維新にあった可能性が閉ざされ、他方で、制度的には近代国家の体制が確立されていった過程があったからです。つまり、彼らはそれ

ぞれ政治的な闘いに敗れ、それに対し、内面あるいは精神の優位をかかげて世俗的なものを拒否することで対抗しようとしたのです」（「漱石の多様性——『こゝろ』をめぐって」）。

ひとつの「時代」の「始まり」や「終り」に一喜一憂を繰り返すのはいつの時代も変わらない。しかし、私たちは少しそこから身を引き離して考えてみるべきではないだろうか。おそらく、「知性」はそこからしか生まれてこない。

以下に、その参考になる（と私が考える）本・音楽のリストを挙げた。図書館や本屋で手にとって読んでみてほしい。

1. 森鷗外「かのように」(『阿部一族・舞姫』新潮文庫)

新潮文庫を挙げたが、著作権の切れた文学作品を無料で公開しているサイト「青空文庫」でも読むことが出来る。

既に上の文章で幾度も繰り返した「かのように」という言葉は、この小説を踏まえたもの。私たちは「歴史」「国家」「個人」といった様々なものを存在する「かのように」認識して生きている。その虚構性に気づいてしまった知識人の煩悶。

同じく鷗外の作品では、乃木希典の殉死を踏まえて書かれた「興津弥五右衛門の遺書」も併せて読んでほしい。

2. ジョン・ケージ「4分33秒」

「4分33秒」という曲名に惹かれて聴いてみるとおそらく驚愕するだろう。

4分33秒の無音なのだ。この無音のなかに響く室内の音こそが作品化された作品。ここにおいて、私たちの生活は、「4分33秒」という作品の額縁の中に切り取られてしまっている。

3. 柄谷行人『漱石論集成』（平凡社ライブラリー）

デビューから一貫して漱石を論じてきた稀代の批評家の論集。ある書物のあとがきで、筆者はマルクスを読むように漱石を読んできたと述懐している。思想家としての漱石をその「可能性の中心」において読む筆者の気迫には尋常ならざるものがある。同じ著者の『日本近代文学の起源』（岩波現代文庫、講談社文芸文庫）も必読。

4. ルネ・ジラルール『欲望の現象学』（法政大学出版局）

授業でも扱った「三角形的欲望」の概念が初めて提示された記念碑的な著作。授業では抜粋をコピーしたものを配布したが、少し背伸びをして通して読んでみるのもいいだろう（欲望の三角形の骨子は第一章で詳述されている）。私たちが当たり前に関心をもっている欲望が実は他者の欲望の模倣に他ならないという筆者の主張を、君はどう受け止めるだろうか。なお、この概念を漱石の小説に応用した試みの代表的なものとしては、作田啓一『個人主義の運命——近代小説と社会学』（岩波新書）があり、参考になる。

5. 谷崎潤一郎『痴人の愛』『卍』（いずれも新潮文庫）

既に、島田雅彦、野崎歓、渡部直己の三者による鼎談「舌と耳の作家、谷崎潤一郎」（『ユリイカ』2003年5月号）で指摘されているように、漱石が絶対的な上下関係（師弟関係）を描き続けたのに対して、谷崎の小説に見られるのは、この両者の上下関係を次第に崩壊させて（甚だしい場合には逆転させて）しまうという奇妙な物語構造である。

6. フランク・カーモード『終りの意識——虚構理論の研究』（国文社）

上の文章でも紹介した虚構理論の名著。既に絶版と思われるので図書館で借りて読もう。「人間は、詩人同様、生まれるといきなり『事の最中に（イン・メ

レディアス・レース)』突入し、死ぬときも『事の半ばで(イン・メレディアス・レーブス)』死ぬ。そしてその短い一生を意味づけるために、人生と詩とに意味を与えるような、虚構による始めと終りとの調和を必要とする」。これは現実の人間(私たち)も虚構の登場人物も同じだ。ときには、この世の全てが実は虚構なのではないかと思われてもくるが、どうだろう。

7. フョードル・ドストエフスキー『罪と罰』(上下二巻、新潮文庫)

「道」のためならば、多少の犠牲は致し方ないというKの思想は、いわば極めて消極的な「超人思想」といえるだろう。『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの思想はさらにスケールが大きい。人

間は凡人と非凡人に大別でき、後者が力を発揮するために前者が犠牲になることはやむを得ないというのだ。事実、ラスコーリニコフはこの小説の中で殺人を犯す。一見すると三文小説のプロットに思えるが、『罪と罰』がすごいのは、このラスコーリニコフの踏み越えの後の展開だ。是非、読んでみてほしい。

ドストエフスキーに興味を持った人は、山城むつみの『ドストエフスキー』（講談社）も読んでみてほしい。

《夏目漱石『こころ』読解から前進するために》

『こころ』ブックガイド

【Side-C】「チック」と「タック」の間で

——夏目漱石『こころ』

平成24年5月7日 発行

著者 小峰隆広

編集者 鶴川龍史

発行者 世田谷学園 国語科